

ミステリ読書案内

2023. 7. 5 発行元

第494号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。このところ、私が読みたいと思う本はなかなか出てこない。ということで新顔を二作品取り上げてみた。期待通りとはいかないところが残念だが…。

自然災害が少なくなっほしい…

今、この原稿を書いているのは6月10日。ちょうど梅雨入りの時期。今年ももうすでに線状降水帯とか大雨洪水警報とかの情報が出されている。台風もひとつやってきた。毎年のことだからとは思もの、被害は少なくなっほしい。

理科の教員をやってきたので、「天気図」も1時間ぐらいあれば自分で書けるし、細かな読み取りもできる。今一番頼りにしているのは「雨雲レーダー」の情報。野外での

行事の時は、天気の見込みは非常に重要。まわりの山々と雲の流れを見て、自分で判断を下すことを長年やってきた。「天気予報」は本当に難しい未来予測だと思う。

最近大きな地震も連続で起きて話題になっている。「地震」もまた私の専門分野なので、いろんな意味で気にかかる。震源の位置、深さ、マグニチュード…。そしてプレートなどの場所かがポイント。

自然災害、いつかは必ずやってくる。被害をいかに少なくするかを皆で考えていかなければならない。

嵐山駿「警視庁SP特捜」

5月に角川文庫から出た本。初めて読む作家。経歴がほとんど書かれていない。「警察小説」とあったので読んでみる気になった。

でも読んでみてちょっと期待外れの印象。政権に直結した政治の話題が中心になっており、なおかつ、主人公の警視庁SP・湊一馬の活躍だけがメインの展開。「警察小説」としての組織の動きがほとんど登場しない。一方的なストーリーとも言える。一馬は環境大臣・雨宮佐知子のSP。箱根駅伝往路のゴールで大臣が狙撃される場面からスタートする。靴の踵部分の被害で済んだが、続いて千葉での展示会場では防弾靴で防げたものの、跳弾が大臣の顎を掠める事態に。事件の背後にあるものは

皆藤黒助「環司先生の謎解き辞典」

5月にポプラ文庫ピュアフルから出た本。この文庫は小粒ながらも安心して読める作品が並んでいる。本書の副題は『チカと文字禍とラブレター』。作者の皆藤黒助はライト系の出身でミステリ専門の作家ではない。本書は「漢字」を手掛かりにして考える「解説ミステリ」。

高校二年生の知華が主人公。背が低いけれども陸上部で活躍している元気者。現国の授業を担当している環司先生との交流が柱になっている。5編に分かれた連作形式。最初の頃は身近で起こる小さな謎を「漢字」絡みで解く形になっている。ただ、いろんな伏線が張られているので、それが第四話、第五話になると大きく展開に結び付いてくる。最後に明かされる結末とは…。

今野敏「ランパー」

5月に徳間書店から出た本。『横浜みなとみらい署暴対部』シリーズの7巻目。前巻の『大義』は短編集だったが、今回は長編。所轄の暴対部で係長の役目をしている「ハマの用心棒」=諸橋警部とそれを補佐する城島警部補の活躍を描くシリーズ。今回は県警本部捜査二課からの依頼で伊知田組が取り込み詐欺に関係している事件の応援に駆り出される。大量の冷凍食品を注文し品物を受け取ると姿を消すという形。それらの品物が秘密裏に納められているらしい倉庫を発見してガサ入れを実施するのだが…。横浜という場所柄で、中国関係の繋がりが裏で事を複雑にしている。『任侠』の神野組長も登場する。

富樫倫太郎「スカイフライヤーズ 警視庁ゼロ係小早川冬彦II」

5月に祥伝社文庫から出た本。『生活安全課0係』シリーズから『警視庁ゼロ係小早川冬彦』シリーズに転換して二作目になる。『小説NON』に連載された後、文庫になったもの。全国の未解決事件を取り扱う部署という名目なので、よりトラベルミステリ化してきている。本書は特に飛行機を使った移動がテーマ。

小早川冬彦の元に十年前の事件を再捜査してほしいという申し出があった。沖縄の玉泉洞の近くで起きた事件で、東京で会社員をしていた若い女性が刺殺された。現場には「R」の血文字が残されていた。少し離れた場所に彼女にストーカーとして付き纏っていたと思われる男が死体で見つかった。当時は男が女性を殺して自殺したと判断され、被疑者死亡で結末を迎えていた事件。男の母親が癌になり、生きている間に息子の汚名を払いたいと願い出たのだ。冬彦は上層部の命令を聞かずに勝手に全国を飛び回り、女性の当時の不思議な行動から別の角度からの視点を見つけ出していく。そして新たな犯人は…。